

エペソ3章14-21節「強められる祈り」

1A 祈りの相手 14-15

1B 服従 14

2B 家族の元の父 15

2A 願い求め 16-19

1B 内なる人の強め 16

2B キリストの内住 17

3B 愛の理解 18

4B 神の満たし 19

3A 頌栄 20-21

1B 願いを越えて施す神 20

2B 教会による栄光 21

本文

(交読文を本文にする。)エペソ人への手紙 3 章を開いてください。今、交読文で読んだ箇所が今朝の本文です。

私たちは、時々、通常の聖書の学びから離れて、エペソ書をかいつまんで読んできました。前回は、「キリストこそが平和」と題して、二つのものを一つにする平和について 2 章後半から読みました。そして 3 章に入りますと、パウロは異邦人もユダヤ人もキリストにあって一つにからだになるという神の計画は、昔から定められていたけれども、今の時代に明らかにされたという話をします。そして彼は、1 章から語ってきたことに対して、いったん締めくくるために祈りを捧げています。それが今読んだ 14 節以降の祈りです。パウロは、この神のご計画にしたがって、私たちを通して神の力が現れることを願う祈りを捧げています。私たちが強められるように、という祈りを捧げています。

最後は大胆な祈りになっています。「私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に(20 節)」とあります。これだけ大きな祈りをしていますが、ここで思い出していただきたいのは、パウロはこれを牢獄から書いていることです。3 章 1 節を見てください。「あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となった私パウロが言います。」パウロの捧げた祈りは決して、牢獄から出ていくためのものではありませんでした。むしろ、一見、弱々しく見える中で、その弱さの中で強くなる力についてパウロは話しています。パウロが、鎖のつながれた状態にありながら、次の祈りを捧げていることを想像しながら、改めて読んでみましょう。

1A 祈りの相手 14-15

1B 服従 14

14 こういうわけで、私はひざをかがめて、15 天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。

パウロが祈りを行ないます。初めに、「膝を屈めて」祈りを捧げています。これは服従あるいは屈服を表しています。私たちの教会ではあまり行っていませんが、聖書的な祈り方です。ソロモンが神殿奉獻の時に祈りを捧げましたが、ひざまずいて祈っていました(1列王 8:54)。イエス様ご自身も、ゲッセマネの園において、ひざまずいて祈られました(ルカ 22:41)。使徒パウロも、エルサレムで迫害に遭うことが分かりながらツロの港を出る時に、ツロにいる弟子たちと、「ともに海岸にひざまずいて祈ってから、私たちは互いに別れを告げた。(使徒 21:5)」とあります。教会の中でも、ご自由にこのような形で祈ってくださっていいです。

2B 家族の元の父 15

そして、パウロは「父」の前で祈っています。私たちは天地を創造した神を「父」と呼んでいます、私たちの神は「お父さん」と呼ぶことのできる方です。「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。(ローマ 8:15)「アバ」という呼び名は、今のイスラエルでもよく聞きます。小さな子供がお父さんと呼ぶ時に使う言葉です。ですから、教会では「お父様」と呼ばずに、「お父さん」と呼ぶところもありますね。

ここで大事なのは、パウロがなぜここで父なる神を強調しているか、であります。「天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父」と説明されている点です。パウロが何でこんなことを言っているかと言いますと、この直前に大きな神の家族について話していたからです。2章19節を見てください、「こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。」ユダヤ人が互いに同胞であり、そして神の民として一つの家族であったところが、実はキリスト・イエスにあって異邦人も一つの家族の中に入ったのだ、ということでもあります。すでに地上を去り、天にいる信者もおり、それで天も含めて、神の家族の中でパウロがその家長であられる父に祈っている、ということです。

私たちに開かれた神の豊かさは、私たちが神をそれぞれ父として仰いで、一つの家族とされているということです。ここの部分をぜひ心に留めていてください。これが分かれば、教会に来て良い恰好することが、阿呆くさく思えます。また、妬んだり競争することもあほらしくなります。肉の家族でそんなことはしません。一つなのですから、ある人はゆつくりと休み、けれども協力して家の事を行っていきます。霊の家族も同じです、父のみが権威者ですが、その他の人々は兄弟なのです。

私たちは、日本のカルバリーチャペルのカンファレンスに参加しました。そこは、気の知れた仲

です。誰が優れているか、どの教会が大きいのかという競争は一切ありません。そして、聖霊の働きを待って、その賜物を用いて互いに仕える、アフターグロー(afterglow)の時間がありました。その時に、その集会を導いている人がこう言いました。「私たちは、同じカルバリーの家族だから、失敗しても恥ずかしくない。」例えば、預言の言葉が与えられ話したけれども、実は的外れだった、ということがあり得ます。コリント第一 14 章には預言を吟味しなさいとあるので、吟味したところ間違っていることに気づく、ということもあります。けれども、同じ仲間なんだから勇気を出して、言葉が与えられたと思ったら、言い出してくださいということです。

2A 願い求め 16-19

そして願い求めをパウロは行います。合計四つの願いを行いません。一つ目は 16 節、「強くしてくださいように」、二つ目は 17 節「キリストが内に住んでいてくださいますように」、三つめは、19 節、「キリストの愛を知ることができますように」、そして四つ目は同じく 19 節、「神の満ち満ちたさまにまで、満たされるように」ということです。

1B 内なる人の強め 16

16 どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。

父が私たちの内なる人を強くしてくださいます。まず、何にしたがって強くして下さるか見てみましょう。「その栄光の豊かさに従い」とあります。私たちは、神の栄光が啓示されると喜び、その喜びが力となります。「またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいきます。(ローマ 5:2)」喜んでると、患難さえも喜ぶという、次の信仰告白ができたのです。そしてその栄光とは、神が一方向的にキリストにあって私たちに行ってくださったこと、神の恵みの栄光です。「それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。(エペソ 1:6)」

私たちは毎年初めに、アメリカのカリフォルニアで行われる宣教会議に出席します。私たちはいつも、そこでリフレッシュ、新たな力が与えられます。なぜか？ 賛美から始まりますが、賛美の中心は神であり、神の恵みなのです。私たちが何かしたか、という内容ではなく、神が私たちのために力強い御手によって成し遂げてくださったことを歌います。恵みの栄光であり、栄光の豊かさなのです。そして、御言葉の時間も同じです。何か御霊の力強い働きをした、大勢の人が救われたという証しも励まされます。しかし、スピーカーの中には、例えばポーランドで十年間、神に仕えたが救われたのは十本の指に収まってしまう、というものでした。これもまた、神の国の進展の中で起こったことです。このように私たちが何かをしたということではなく、神が行ってくださったことに焦点を合わせる時に、私たちは力を受けるのです。

そして、「御霊により、力をもって」とあります。御霊による働きについて、パウロは前に御霊によ

って啓示を受けるように、と祈りました。「どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。(エペソ 1:17)」私たちは、神がキリストにあって行ってくださったことを知るには、私たちの肉体にある五感では知ることはできません。御霊による知識が与えられなければ、知りようがありません。

しかしここでは、御霊による啓示のみならず、「御霊による力」について話しています。ここでの「力」は、ダイナマイというギリシヤ語で、英語のダイナマイトと同じ語源です。イエス様が弟子たちに約束された聖霊の降臨においても、「聖霊があなたがたの上に臨まれると、力を受けます。」という時も同じ言葉が使われています。

私たちはしばしば、知ることだけで満足します。また理解することができない、知ることができなければ信じることができない、と言います。しかし、福音というのは本質的に、理解することではなく力を受けることなのです。「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。(ローマ 1:16)」ゆえに、パウロはコリントにある教会に対して、自分は十字架につけられたキリストの他には知らないことに決めた、と言っています。「私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたものではなく、御霊と御力の現われでした。それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした。(1コリント 2:4-5)」

1994年にビリーグラハムが日本で伝道集会を開いた時に、彼は手をまっすぐに正面に伸ばして、こう説教しました。「私はパーキンソン病にかかっています。しかし、薬を飲んでいるので、ほら、手が震えません。どのように薬が、手の震えを抑えているのか私には分かりません。けれども、薬を飲めば止まることを知っています。十字架の言葉も同じです。なぜ、十字架に付けられたキリストがあなたを救うのか、それを理解する必要はないのです。信じることによって、救われる力を受けるのです。」理解しようとするから、つまずきます。信じれば力を受け、そして体験的に理解できるのです。

そして大事なのが、「内なる人」が強められるということです。内なる人というのは、神の御霊と直接接する、霊の部分のことです。御霊によって、神の子供として新しく生まれた、その人のことです。パウロは、牢から出ることを願うよりも、牢の中における日々の圧迫に対して、内なる人が強められていくことを願い、それを他の聖徒たちにも願ったのでした。

私たちは日々の戦いがあります。内なる人が、悪魔や悪霊どもの攻撃の的となります。私たちはヨブ記を通読していますが、ヨブの呻きを読んでいくと、彼はその激しい肉体の痛みもさることながら、もっと苦しいのは「なぜ、神がこのような苦しみを許されるのか」という、その原因と理由が分からないという苦しみです。神はご自分の主権をもってサタンが彼の財産と彼の健康に触れることを許されたわけですが、サタンはこのようにして私たちの内なる人に、病原菌のように蝕んできま

す。そこで、パウロが祈るのです。父の栄光の豊かさにしたがって、御霊によって、力をもって、内なる人が強められることを祈っています。

2B キリストの内住 17

こうして一つ目の願いをパウロが神に立てました。この願いは次の願いに続きます。関係のない別々のものではなく、そのまま続いています。

17a こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。

内なる人が強められますと、私たちはキリストご自身が自分の内に住まわれていることを、はっきりと認めることができます。ここの「住まわれる」というのは、ちょうどイエス様がほっとして、自分の家に憩われていることを意味します。有名な冊子で、「私の心はキリストの住まい(My Heart Christ's Home)」というものがあります。ロバート・B・マンガー(Robert Boyd Munger)という人が書いたものです。¹ここの箇所を使って、イエス様がお客様として自分の家に入って来られたことを想定して書いたものです。

イエス様を自分の書斎に案内します。そこには自分の思いの中にある情報が置いてあります。本であったり、雑誌であったり、写真であったり。けれども、その中にはイエス様に見てほしくない恥ずかしいものがありました。イエス様に、「これを取り除くのを助けてくださいませんか。」と尋ねると、イエス様は、「もちろんです」と言われました。コリント第二 10 章 5 節に、「すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ¹」とあります。次にダイニングに連れて行きます。そこには自分の腹を満たす、好きな食べ物が並んでいました。けれどもイエス様はこう言われました。「わたしを遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることがわたしの食物です。(ヨハネ 4:34)」自分の肉や生活を満足させるのではなく、神の御心を行なうことで満足する生活です。

それから居間に案内します。とても快適ですね。イエス様が、「ここで毎朝、いっしょに語りあいましょうね。」と言われました。けれども、生活で忙しくなり、ほとんど時間を朝に過ごせなくなりました。けれども実は、イエス様は毎朝、待ってくださっていたのです。お客さんであるイエス様を無視して、毎朝出勤していました。イエス様は愛しておられます。だから、交わりたいと願われています。朝に静かな時を持つことは大切です。

そして、仕事場に連れていきました。地下にあります。そこで彼が作ったものは、小さなおもちゃ二つだけでした。イエス様は、「あなたは神の国のために、自分の持っているものをどれだけ使ったのですか？」と問われました。そこでイエス様は、「わたしにあなたの手を貸しなさい。わたしの

¹ 国際ナビゲーター出版部から日本語版、出版されている。

霊をあなたを通して働かせます。あなたは、能力はないのかもしれませんが、聖霊はすぐれた働き手です。もしあなたがこの方に支配をゆだねるなら、あなたの手でこの方は働かれます。」

そして、遊戯室、遊び場がありました。そこにイエス様はあまり来てほしくないと思いましたが、イエス様はどんな時にいっしょにいたいと言われました。そしてついに、玄関の戸棚があります。そこは悪臭を放っていました。絶対に見せたくないところですが、イエス様は「わたしに鍵をくれれば、きれいにします。」と言われました。恐ろしかったのですが、もしこの悪臭が続くなら、わたしはこの家にいることはできないと言われました。交わりができない、とのこと。それでカギを渡しました。これについて、勝利が与えられました。罪の生活に対する勝利です。

けれども、もっとも簡単なことは、実はイエス様にこの住まいの主人になっていただくことです。これまではお客さんでしたが、イエス様に所有権を明け渡し、自分が今度は僕となるのです。こんなことが書いてあります。キリストが私たちの心に住まわれるのです。

3B 愛の理解 18

17b また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、18 すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、19a 人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。

三つめの願いも、二つ目の願いの続きになっています。キリストが私たちの心に住まわれると、キリストにある愛を知ります。そしてその愛は、言葉が矛盾しているように聞こえますが「人知をはるかに越える」愛です。人知を超える愛を知ることができますように、という言葉は矛盾しているように聞こえます。けれども、これは愛が単なる知識ではないことを教えています。自分の知識を越えて、霊的に、直感的に、そして実感として体験するということです。ですから、私たちキリスト者の目標は、聖書を体系的に、知的に把握することではありません。聖書の体系的、知的な理解はもちろん役に立ちますが、それがキリスト者の目標では決してないのです。あくまでも、キリストの愛を体験的に知ることです。今の自分の信仰生活が、どちらの方に向いているでしょうか？

まず、「愛に根ざし、愛に基礎を置いている」という言葉から見ましょう。「根ざす」というのは、根を張ること、つまり菜園の言葉です。キリストの愛に養われているかどうか、ということでもあります。ちょうど詩篇一篇の、神の御言葉を思い巡らす人について書いています。「その人は、水路のそばに植わった木のような。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。(3 節)」これは、ゆっくりと主にあって休み、その愛に育まれる、幼子のような態度です。

そして基礎を置くというのは、建築に使われる言葉です。つまり、愛によって生活の安定が与えられているかどうか、であります。自分が何かをしたから神に愛され、受け入れられるのではありません。神は愛ですから、愛ではないことを神は行うことができません。実に神は、私たちが罪人

であった時にご自分の子を死に渡されて、愛を示されました。そして、愛の基礎工事が行われていれば、ちょうどイエス様が洪水の時の二つの家の例えにあるように、試練の時にも耐えることができる、神との愛の関係を持っていることができます。ですから、愛に深みが与えられ、安定して成熟していることを示しています。

そして、私たちは、とてつもなく祝福された中にあります。それは、その愛を育み、愛に建て上げられる、まさにその現場に置かれているからです。そうです、教会です。この教会こそが、キリストが満ちておられるところです。神がこんなにもキリストによって愛されたことを知っている人々の共同体です。だから、兄弟の間は愛で結ばれます。神の置かれた神秘的な体なのです。

みなさん、ぜひ互いに交わってください。祈りあってください。恵みを分かち合ってください。ご自分の苦しみを祈ってもらってください。そして助け合い、仕え合ってください。こうすることによってキリストをどんどん知っていくことができます。「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。(1ヨハネ 4:7-9)」

そして次に、「すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり」とあります。すべての聖徒とありますね、再びパウロは強調しています、私たちはもっと大きな神の家族の中にいるのだということです。そして、愛の「広さ」です。全人類に広がっているキリストの愛です。キリストは世界のなだめの供え物となるために、死なれました。異邦人のような、神から遠く離れた人々もキリストの愛の対象です。ですから、百匹のうち一匹、遠く離れた羊も九十九匹を置いて捜しに行きます。

次に、キリストの愛の「長さ」です。神の愛は永遠の愛です。十字架の上で御子を通して成されたことは、二千年前のパウロであっても、現在の私たちであっても同じなのです。ルターは、「キリストが死なれたのは、つい昨日のこのように感じる。」というようなことを話しました。そして永遠の将来、新しいエルサレムにおいてもこの方は「小羊」と呼ばれます。まだ、裂かれた脇腹と釘が刺し通された穴が残されているのです。そして、キリストの愛の「高さ」です。キリストが死なれたことによって、私たちは天に入ることができるようになりました。天は、キリストのように正しくなければ入ることができないところです。しかし、キリストの罪の犠牲にある神の愛は、聖なる神の座す天にその者たちが入ることのできるまで高い愛であります。そして、キリストの愛の「深さ」です。キリストの愛は、それを知ったときもありますが、それで終わるものではありません。さらにさらに深く、キリストの愛は私たちに迫ります。どんなに罪を犯して、どんな深みに陥ってしまっても、それでもキリストの愛はそこから引き上げることができます。

4B 神の満ちし 19

そして四つ目の願い求めは、「こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。」これは、どうやってできるのか？と思います。神の満ち満ちたさまとは、いったいどうなのでしょう？天の天もあなたを収めることはできない、とソロモンは告白しました。天の天もお入れすることのできない神に、どうやって満たされることができるのでしょうか？しかし、できるのです。それは、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることにより、神の満ち満ちたさまに満たされることができます。キリストの愛に神の満ち満ちたさまがあります。

大事なものは、立ち位置としてはすでに満たされています。「あなたがたは、キリストにあつて、満ち満ちているのです。(コロサイ2:9)」すでに満ちているのです、しかしそれを体験できるように、今、パウロは祈っています。

3A 頌栄 20-21

そして最後に頌栄があります。これだけの満ちしがあるので、次の大胆な祈りがあります。

1B 願いを越えて施す神 20

20 どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、

神は全能の力を私たちのうちに働かせることができます。それは、繰り返しますが超人的になるものではありません。むしろ、弱さの中にこそ強くなれる、弱さを誇る力があります。そして、願うこと、思うことのすべてを越えて豊かに施すことができます。イザヤ書に、「あなたの道とわたしの道は異なる。天が地より高いように、わたしの道、わたしの思いは、あなたの道、あなたの思いよりも高い。」ということを言われました。祈りは私たちの願いの通りではないのです。しかし、その願いははるかに大きな方法で、私たちの思いを越える方法で答えてくださいます。

2B 教会による栄光 21

21 教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

祈りを神が聞かれることによって、栄光を受けるのは神ご自身です。そして大事なものは、教会があつて、そしてキリスト・イエスがおられて、それで神が栄光を受けます。パウロはここまで教会を高くみなしています。教会がこの力を体験することによって、そしてもちろん教会にキリストがおられて、それで神が栄光を取られるのです。ぜひ祈りましょう。